

北のとびら

vol. 111

平成29年3月

特集

市民参加型演劇制作事業 発足15周年
あさひサンライズホール(士別市)
市民参加演劇の継続でつくる
まちの交流拠点=劇場

平成28年度 アート選奨
(アート選奨K基金事業)



アートの子カラを考える

清水沢コミュニティゲート(夕張市)

街歩きアート

過去と現在、伝統と新しさが融合し
進化する、ものづくりのまち

[室蘭市]

エッセイ

穂村 弘

表紙作家の紹介

酒井 広司





- 9 「花火、舞い散る」2010
- 10 「境目に降る雪」2011
- 11 「グッバイ父さん」2012
- 12 「シング・シング・シング」2013
(北海道舞台塾事業)
- 13 「君の先」2013
- 14 「ウラルの森」2014
- 15 「裸電球に一番近い夏」2015

- 1 「明日も陽だまりで」2003
- 2 「花の嵐団九郎一座」2004
- 3 「なにもしない冬」2005
- 4 「臉の母」2005
- 5 「弁天堂顛末記〜春はぼたもち」2006
- 6 「春日ノ原駅のこと」2007
- 7 「ホテル・トトロップへようこそ」2008
- 8 「ピアノにあいたい」2009

●特集
市民参加型演劇制作事業 発足15周年
あさひサンライズホール(士別市)

市民参加演劇の継続でつくる まちの交流拠点=劇場

人口2000人足らずの旧朝日町で、平成6年に誕生した公共施設「あさひサンライズホール」。
士別市と合併以降も、市全体の文化振興の要となり、鑑賞事業や小中学校へのアウトリーチ、市民参加による演劇制作などの自主事業を実施してきました。
約15年の間に制作した舞台の数は、学校教材用も含めると35本以上にもなります。
小さなまちでの演劇制作事業が育んだ、劇場を中心としたコミュニティの有り様を紹介します。

第一線で活躍する演出家と
約2カ月間の芝居づくり

「オーディションはなく、希望する人は全員、出演できる」。これはあさひサンライズホールが実施している市民参加型演劇制作事業『体験版芝居で遊びましょ』で、平成15年度のスタート時から守られてきた決まりごとです。

「事業の目的はコミュニケーションのプラットフォームを作ること、上手な演技を披露することではありません。だから、上演は基本的には1回だけだし、それぞれの生活があるので稽古の欠席もやむを得ない」。あさひサンライズホールの館長であり、創設準備から一貫してホールの運営に携わってきた漢幸雄さんはそう言います。まちの外から招く演出家にも、この決まりごとを最初に伝えて依頼しているのだそうです。

ただし「上演する以上、鑑賞に堪える作品を目指します。そのためには大人が全力で、真剣になって遊ぶ必要がある。またそうしないと、いい関係性は生まれな」とも。脚本・演出は第一線で活躍するプ



あさひサンライズホールの館長、漢幸雄さん

口に依頼し、演出家は1〜3カ月ほどまちに滞在して制作に当たります。上演日が迫る頃には演出家から厳しい指導がビシビシ入るようになり、気がつけば、参加者もそれに応えようと無我夢中になっているのだそうです。

1回目の『体験版〜』では、長年札幌で演劇づくりに関わってきた斎藤ちずさん（NPO法人コンカリーニョ理事長）に演出を依頼。斎藤さんは一年間まちに滞在し、舞台経験がない人がほとんどの参加者とワークショップを通じてコミュニケーションをとりつつ、「芝居で遊ぶ」ということを浸透させていきました。

翌年は、集客記録において北海道NO.1の実績を持つ劇団イナダ組の主宰・イナダさんが脚本・演出

られたのがあさひサンライズホールです。

設立から最初の10年間、事業は舞台芸術や音楽などの鑑賞が中心でした。しかし「劇場が小さな地域コミュニティで担える役割は、交流拠点となること。そのためには市民参加の自主企画事業が必要」と、当初から考えていた漢さん。ビッグバンドや合唱、ダンスなどでの可能性を探っていたと言います。

演劇を選んだのは「誰でも参加できるから」。子どもも高齢者も、望めば寝たきりの人でも出演できる。さらに、衣装や大道具製作などの役割もあり、人前に出ることが苦手な人でも「縫うだけなら…」と参加してもらえる。大勢の人が関わり合うためのツールとして演劇に勝るものはない、と考えたのです。

現在、『体験版〜』には「6回出演したら出演者を卒業する」というルールがあります。常連が居着くのではなく、部活動のようにメンバーがゆるく入れ替わること、ノウハウを受け継ぎながら新しい関係性が生まれることを狙っているのです。卒業したメンバーはスタッフとして参加したり、独自に劇団を作る

を担当。以降、道内のみならず東京で活躍する演劇人に脚本・演出を依頼して回を重ね、これまで森さゆりさん（文学座）、大関真さん（劇団スパー・エキセントリック・シアター）、日澤雄介さん（劇団チョコレートケーキ）などが、地域の人たちと触れ合いながら演劇制作に当たってきました。脚本は全て、出演者の個性に合う役柄を登場させてつくる「当て書き」です。



『体験版 芝居で遊ばしよ♪』vol.14で脚本・演出を担当した中島淳彦さん。劇団ホンキートンクシアターで作・演出を手がけ、解散後はフリーの脚本家として活躍。現在、劇団道学先生、劇団ハートランドの座付き作家。主に人情味のある喜劇を得意とし、さまざまな劇団などに新作を書き下ろしています

発足15周年、14回目の実施となる今年も、9回目に脚本・演出を担当した中島淳彦さん（劇団道学先生）に再び依頼。3月11日、音



楽喫茶時代の懐かしい歌を交えて展開するファンタジー音楽劇『夕日峠第十六診療所のニセ医者と患者ども』を上演しました。

「正直なところ、劇としては完成には届いていません。けれど、何年後、何十年後に思い出しても『あのときは頑張ったなあ！』と思える、宝物みたいな時間になってくれたらいいな、と思ってます」と中島さんは言います。「この企画の趣旨は芝居で遊ぶこと。でも命がけで、自分のできること以上を目指すことが『大人の遊び』なんです。失敗してもいい。しっかり遊ぶことは、

などして演劇や劇場と関わっています。

『体験版〜』の参加者は市民に限らず、近隣市町村や遠くはオホーツク沿岸の西興部村から通った人も。また、転勤や結婚でまちを去った人の中には、上演を観に戻ってくる人もいます。芝居に関わった人同士で結婚した夫婦は10組近く。その

結婚式に出席するために東京から来てくれた演出家もいれば、宿でなく住民の家に宿泊するようになった演出家もいます。また、一流の演出家やスタッフからのアドバイスを受けて成長してきた大道具チームは、工房を立ち上げてプロの公演の舞台美術製作を引き受けるまでになりました。

「演劇で大人が真剣になって遊んだ結果、まちの内外で新たなつながりが生まれました」と、漢さんは胸を張ります。「劇場にできるのは、倦まず耕し続けてよい土を作り、種を播き、析ること。そこから先は、種が芽吹き花を咲かせ、また種を付けることで受け継がれ、広がっていつてくれるでしょう」。

目指しているのは「誰もがどこかに居場所を見つかることができる、豊かで熟成したコミュニティ」。その交流の拠点としてあり続けるために、あさひサンライズホールの取り組みは続けられていきます。



平成29年3月11日に上演された、『体験版 芝居で遊ばしよ♪』vol.14『夕日峠第十六診療所のニセ医者と患者ども』の一場面。出演者21名、スタッフを合わせると延べ60名が事業に参加しました

●特集
市民参加型演劇制作事業 発足15周年
あさひサンライズホール（土別市）



炭鉱のまちで生まれる
人とアートの関わり

産が残されています。

「今に続いている炭鉱コミュニティも含め、清水沢地区はまるごとが炭鉱遺産の博物館のよう」と、一般社団法人清水沢プロジェクトの代表・佐藤真奈美さんは言います。

佐藤さんは地域振興の研究者として平成20年に清水沢地区と出会い、以降、まちづくりに関わってきました。清水沢プロジェクトでは、まさに継続的に関わるアーティストを募り、住民と交流することで地域の活性化を図る活動を実施。また、訪れる人に産業遺産と夕張のストー

日本の経済発展をエネルギー面から支えてきた北海道の炭鉱。なかでも日本最大規模を誇ったのが石狩炭田で、夕張市はその中心都市として栄えました。

商業・教育施設が多く夕張市の中心的なエリアである清水沢地区には、明治30年に開業した清水沢駅、大正15年に設置された火力発電所と昭和15年に建築された清水沢ダム、戦後に開かれた炭鉱のズリ山(不要な岩石を積み上げた人工山)や炭鉱住宅など、多くの炭鉱遺



清水沢コミュニティゲート



滞在者・松本力さん(アトリエとして使用・3号室)



ズリ山整備作業



旧北炭清水沢火力発電所(2016年)



滞在者・菊池史子さんの成果発表会(1号室)

清水沢地区ではこれまで、「夕張清水沢アートプロジェクト」「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」など、炭鉱遺産に光をあてたイベントが開催されてきました。アーティストや学生、観客がまちを訪れ、共にイベントに関わる中で、まちの人たちが改めて炭鉱遺産の価値を認識し、誇りを抱くようになった...という流れがあります。「まちの活発化や地域の人の意識の変化に、現代アートは大きな役割を果たしています。夕張ファンになって何度も訪ねてきてくれる、そういう関わり方をしてくれる人も増えてきました」と佐藤さん。

炭鉱のまちが創作につながり、創作活動と作品とが、新たな地域と人との関係性を作りだす。夕張市清水沢地区で、まちとアートの素敵な関係性が生まれつつあります。

リーをわかりやすく伝え、まちの暮らしやコミュニティを体験してもらおうガイドとしての役割を担っています。

「清水沢コミュニティゲート」はその拠点として昨年7月に誕生しました。旧炭鉱住宅を活用した施設で、夕張に関心を持つ観光客やアーティストの滞在場所、作品展示スペース、地域の人との交流の場として利用されています。

平成28年度 アート選奨(アート選奨K基金事業)

北海道文化財団では磯田憲一氏からの指定寄附を基に、アート選奨K基金を創設。当財団が主催・共催・支援する芸術文化活動などの中で特筆すべき活動を行い、本道の芸術文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体にアート選奨を贈呈しています。平成28年度の受賞者は次のとおりに決定しました。

木村典子さん

舞台コーディネーター/翻訳者/
(公財)北海道演劇財団「札幌座」プロデューサー

●プロフィール

旭川市出身。1997年に渡韓、翌年から韓国を代表する劇団「木花」で制作・劇場運営を担当。2008年からはフリーランスのプロデューサー、舞台交流コーディネーター、通訳・翻訳者として活動。2014年6月に帰国し、現在、公益財団法人北海道演劇財団「札幌座」プロデューサー、日韓演劇交流センター専門委員として活動。

日韓の演劇交流をコーディネートする不可欠な支え手として、全国的にもその活動が評価されている木村典子さん。韓国の文化状況や文化政策にも精通しており、日韓文化交流会議の委員として両国政府に提言書を提出するなど、全国的にもその実績が認められている方です。

北海道文化財団と光州演劇協会の10年間に渡る相互交流を、高いコーディネートスキルで支え続け、唯一無二の存在として双方から厚い信頼を得ています。また、光州文化財団との橋渡し役を担うなど、北海道と韓国の芸術文化の交流を推進するリーダー的存在として、今後も大きな期待が寄せられています。



飛生アートコミュニティ(白老町) 代表・国松希根太さん

共同アトリエ/コミュニティスペース/アートプロジェクト

●プロフィール

白老町にある旧飛生小学校の木造校舎を活用して、1986年に設立された共同アトリエ(設立メンバーは國松明日香さんほか4名の美術家)。2002年に國松明日香さんのご子息・国松希根太さんが引き継ぎ、さまざまなアーティストの活動の場に。近年は校舎を一般開放して開催するイベントのほか、滞制作ワークショップを実施するなど、地域との交流の場としても役割が増している。

飛生アートコミュニティでは設立メンバーの精神を引き継ぎつつ、若手アーティストが中心となって「飛生芸術祭」「トビウキャンプ」「飛生の森づくりプロジェクト」などのアートプロジェクトを開催。創作・表現活動を軸にしながらも、地域住民や他地域との交流、アートと社会や人と人をつなぐ場づくりなど、新しいものを発信しようというエネルギーに満ちた活動を行っています。

アーティストを介した地域づくりは全国的にも注目されており、北海道の芸術文化を担う新しい文化拠点として、今後ますますの発展が期待されています。



過去と現在、伝統と新しさが融合し
進化する、ものづくりのまち

【室蘭市】

噴火湾に面し、鉄鋼業で栄えてきたことから「鉄のまち」と称される室蘭市。近代におけるものづくりの拠点として培ってきた技術は、進化しながら受け継がれ、まちを発展させてきました。湾岸に工場が立ち並ぶ一方、豊かな自然が身近に広がる独特の環境は、近年は撮影スポットとしても注目を集めています。異なる要素を合わせ持つまちは、つねに新たな可能性に満ちています。



室蘭のものづくりの原点

日本製鋼所室蘭製作所
瑞泉鍛刀所

日本製鋼所は、明治40年に室蘭の地で創業して以来、近代日本の鉄鋼業を支えてきました。現在も、発電所で使う大型の鍛鋼品の製造などにおいて高い技術を誇ります。一方で、早くから伝統的な技術の継承にも力を入れてきました。

日本製鋼所が設置した瑞泉鍛刀所(ずいせんたんとうじょ)は、全国唯一の企業内にある刀鍛冶工房です。大正7年、近代化で失われつつあった日本刀の作刀技術を守り伝えるため、滋賀の名工だった堀井親子を招へいたのが始まり。代々堀井家が刀匠を務め、現在は4代目の堀井胤匡(たねただ)さんと、5代目となる佐々木胤成(たねしげ)さんが受け継いでいます。

作刀には、大きく「鍛錬」「組み合わせ」「焼き入れ」の3工程があります。最初に行うのは、砂鉄から作られた玉鋼(たまはがね)を約900度の炎で熱し、叩いて平らに伸ばしたのち、固い鋼と柔らかい鋼に分ける作業。刀は、柔らかい鋼を固い鋼で包むというように、性質の異なる鋼を組み合わせで作ります。刀の原型を作ったあとは、粘土を塗り、固さを調整しながら焼きを入れ、刃を研ぐ手前まで仕上げるのが刀鍛冶の仕事です。

現在、日本刀は美術品や武術、研究目的として需要があり、全国から注文が絶えないとか。「日本刀はたんなる装飾品ではありません。実際に使える業物(わざもの)として、武器という本分を忘れないように作っています」と胤成さん。刀づくりの現場から、伝統工芸と現代技術のつながりが見えてきます。

日本刀独特の刃文(はもん)は、焼き入れて塗る粘土の厚みの境目に現れる



胤匡さんがふいごで炎を調節しながら玉鋼を熱する



小刀(ペーパーナイフ)も製作



しのぎ(一番厚い部分)の曲がりがないか確認する胤成さん



工房に隣接した資料室

●室蘭市茶津町4
☎0143-22-0143(総務部総務グループ 鍛刀所管理担当)
※見学・注文は、上記へお問い合わせ
www.jsw.co.jp

鉄の楽しさ、面白さを体感

鉄のものづくり体験 輪西八条アトリエ

かつて新日本製鐵(現・新日鐵住金)の門前町として賑わっていた輪西地区に、室蘭の鉄の文化や、鉄を身近に感じられる体験の場が誕生しました。開設したのは、輪西商店街の有志が中心となり結成したNPO法人テツプロで、ボルト人形「ボルタ」を製作していることで知られます。



須藤さんも輪西に事務所を構え活動している

アトリエを担当するのは、プロダクトデザイナーの須藤大介さん。「鉄のまちといっても、実際に製鉄などの現場を見たことがない市民が多い」と話します。ここには鉄を加工できる設備が揃い、須藤さん指導のもと、溶かしたり叩いたりしながら、鉄に触れる体感ができます。

メニューはキーホルダーやマグネット作りなど。製作しながら鉄の特性を自然に学べるのが大きな特徴です。鉄が熱や手によって刻々と表情を変える様子は、まるで生き物のよう。温かく柔らかな鉄の面白さに、驚くに違いありません。



コークスで熱した鉄を叩いて曲げ、キーホルダーを作る体験

●室蘭市輪西町2丁目3-10
(川原家具店倉庫)
☎0143-84-5510
(ノールドesign)
※体験は完全予約制
(HPに予約サイトあり)。
夏休み期間は
土・日のみ予約なし可
www.tetsupro.com/atelier/



イベントでの溶接体験がきっかけで誕生した「ボルタ」

知られざる絶景を伝える

「室蘭工場夜景+α展」実行委員会

近年、全国的に話題となっている工場夜景のひとつが室蘭です。市職員の森大輔さんは早くから工場夜景に注目し、アマチュアながら約6年にわたり撮影し、写真展やパネル展も開催してきました。もともと炭鉱など産業遺産に興味があり、開拓の歴史とともに辿るなかで、室蘭とのつながりに気づかされたと言います。「空知の石炭があり、鉄道が敷かれ、積み出し港として栄えた室蘭のまちの成り立ちを写真で記録し、広く伝えたい」と森さん。「+α」は、現在の室蘭の産業としての工場と、過去の空知の産業とのつながりを表しているそうです。

さらに、市内で秘境と呼ばれる場所でのウォークイベントも実施。あまり知られていない絶景が見られるなど、鉄のまちの意外な魅力を発見できます。



鷲別岳の麓「すだれの滝」水爆。ナイトウォークも実施した



連の葉氷が浮かぶ港と工場夜景



実行委員会という名で、森さん1人で活動中

●室蘭工場夜景+α展 じっこういんかい (Facebook)
作品はフェイスブックにて公開(未登録でも閲覧可)。ナイトウォークの参加募集も告知
www.facebook.com/muroranyakei/

Column

市民が支える、絵画のまち 室蘭市民美術館

室蘭出身の西村貴久子、室蘭を拠点とした高野次郎、熊谷善正、写真家では掛川源一郎など、地元ゆかりの作家の作品を中心に、規模は小さいながらも見応えある企画展示を行っています。



大正期の洋画家・中村森(つね)の自画像は、高野次郎が直接譲り受けたもの

設立にあたっては、「室蘭に美術館を」という市民の熱心な運動がありました。平成12年「室蘭に美術館をつくる市民の会」が発足。平成20年10月に念願の美術館オープンを果たして以降は「室蘭市民美術館をささげる会」となり、850名ほどの会員が、施設の企画・運営に様々な形で携わる、全国的に珍しい美術館です。

工藤善蔵館長によると、80年以上の歴史がある室蘭美術協会の創立メンバーだった高野次郎の遺品など、膨大な資料はまだ整理の最中とのこと。披露の日が待たれます。

●室蘭市幸町6-23 室蘭市文化センター地階 ☎0143-22-1124
開館時間 10:00~17:00 休館日 月曜(祝日の場合は開館)、祝日の翌日、年末年始 入館料無料
muroran.exblog.jp(室蘭市民美術館をささげる会ブログ)



今年1月、入館者13万人を達成

幻の同級生

或る日のこと。北海道大学時代の同級生の名前を思い出せるかぎりネットに打ち込んで検索してみた。まったくヒットしなかった。だんだん不安になってくる。こんなことってあるだろうか。検索の仕方が下手なのか。或いは、結婚して苗字が変わったという人もいるだろう。でも、それにしても痕跡がなさすぎる。自分が子供の頃に好きだったお菓子とか歌のフレーズなどを検索して、一件も出てこない、本当はそんなものはなかったのかもしれない、という気持ちになる。まさか、北大に通っていたこと自体が夢だったなんてことはないよな。

私が学生だった1981年には、もちろんインターネットなんて影も形もなかった。でも、改めて考えてみると、同級生たちのほとんどはネットでアクティブに活動するというタイプではなかったように思う。気質というかセンスというか。例えば、クラスの有志が作った同人誌のタイトルは「北の海と道」だった。縮めると「北海道」。これである種のパンカラ的な感受性ではないか。当

時だつてバンカラという言葉はもう死語だった。でも、入学式の後に、山伏姿の応援団が寮歌の指導に現れる学校には、その空気がまだ生きていた。「醒めよ迷いの夢さめよ」と始まるストームの歌に合わせて、男子も女子も肩を組み、足を振り上げていたのだ。インターネットのSNS的な交流からはかけ離れている。その後、私は北大をやめて上智大学に入った。北海道の国立と東京の私立では、まったく雰囲気や価値観が違っていた。北大のノリで「醒めよ迷いの夢さめよ」と歌った私は、冗談はよせ、という顔をされた。バブルの時代が始まろうと



絵 / 岡理恵子



穂村 弘 (ほむらひろし)
歌人
1962年札幌市生まれ。著書に『シンジケート』『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』『世界音痴』『本当はちがうんだ日記』『よっ記』『絶叫委員会』『君がいない夜のごはん』『蚊がいる』他。2008年より日経新聞歌壇選者。『短歌の友人』で第19回伊藤整文学賞、「楽しい一日」で第44回短歌研究賞を受賞。近刊に北海道新聞の連載エッセイをまとめた『野良猫を尊敬した日』がある。

表紙作家の紹介

酒井 広司 写真家

Sakai Koji

1960年余市町生まれ、札幌市在住。2016年第68回北海道文化奨励賞受賞。1970年代から北海道を様々なシリーズで撮影、制作している。主に「夏の消失点」(1979年)や1990年代から続く「偶景/Sight Seeing」、「そこに立つもの」、「北海道の旅」などがある。個展のほか「札幌の美術」展(2004年)や「写真の交差」展(1997,99,2000年)、500M美術館オープニング展(2012年)などの企画展にも参加。2014年、札幌国際芸術祭連携企画展「表出する写真、北海道」展(NPO北海道を発信するネットワーク主催)の企画、編集を担当した。同年、第30回写真の町東川賞特別作家賞受賞。公益社団法人日本写真家協会会員、札幌大谷大学美術学科非常勤講師、札幌文化団体協議会会員。



「偶景/Sight Seeing」
200008311342440714301

[主な展示]

1984年 個展「Living」 ギャラリーユリイカ (札幌市)	企画展500M美術館オープニング展
1985年 個展「Living」 ギャラリーユリイカ (札幌市)	「余市駅前国道昭和51年、2012年」(札幌市)
1988年 個展「Living」 ギャラリーユリイカ (札幌市)	企画展 赤平Tantanフェスタ アートプロジェクト
1991年 個展「枯れたものたち」 ギャラリーアイ (札幌市)	「炭鉱の記憶」展 (赤平市)
1996年 個展「Sight Seeing」 札幌市資料館ギャラリー	2013年 企画展 U50,000展 CAI02ギャラリー「写真」出品 (札幌市)
1997年 企画展「写真の交差」 INAXギャラリー (札幌市)	企画展PARC Biotope展 出品
1999年 個展「余市川」 余市町図書館	札幌駅前通まちづくりセンター企画
企画展「写真の交差2」 札幌市写真ライブラリーギャラリー	札幌駅前通地下歩行空間
企画展Double Image展 「Otaru Dream Beach1998」	2014年 写真の町東川賞受賞作品展 「偶景/Sight Seeing」
ギャラリーSEED (札幌市)	東川町文化ギャラリー
2000年 企画展「写真の交差3」 札幌市写真ライブラリーギャラリー	札幌国際芸術祭連携企画展「表出する写真、北海道」展
2001年 企画展「北海道現代写真家たちの眼」展	NPO北海道を発信する写真家ネットワーク主催
札幌市写真ライブラリーギャラリー	コンチネンタルギャラリー (札幌市)
2004年 企画展「札幌の美術2004」展 札幌市民ギャラリー	企画展 「Sapporo Charm Point」展
企画展「ギャップ」展 札幌市写真ライブラリーギャラリー	札幌駅前通まちづくりセンター企画
2005年 個展「そこに立つもの」 M+Oギャラリー (札幌市)	赤れんが展望テラスギャラリー (札幌市)
企画展「北海道、写真のいま ギャップ2」展	2015年 個展「そこに立つもの2」 ギャラリー創 (札幌市)
札幌市コンベンションセンターギャラリー	企画展 「Sapporo Charm Point2」展
2007年 企画展「culture&Nature」展 北海道を発信する	札幌駅前通まちづくりセンター企画
写真家ネットワーク	赤れんが展望テラスギャラリー (札幌市)
モエレ沼公園 ガラスのピラミッドギャラリー (札幌市)	2016年 個展「写真が表れるところ」 NanaoPottery
2009年 個展「Sight Seeing」展 CAI02ギャラリー (札幌市)	(滋賀県長浜市)
個展「印画紙としての写真」展	個展「北海道の旅」 茶廊法邑ギャラリー (札幌市)
コンチネンタルギャラリー (札幌市)	企画展 「Sapporo Charm Point3」展
企画展サッポロアートステージ「白糠縫別1999,2009」	札幌駅前通まちづくりセンター企画
バスセンター地下通路 ※現500M美術館 (札幌市)	赤れんが展望テラスギャラリー (札幌市)
2011年 個展「北海道の旅 セレクトカット」	[受賞歴]
新さっぽろギャラリー (札幌市)	1980年 東京工芸大学フォックスタルボット賞 入賞
2012年 個展「写真のなかの時間」展 ギャラリーレタラ (札幌市)	2014年 第30回写真の町東川賞 特別作家賞 受賞
	2016年 第68回北海道文化奨励賞 受賞

◎北海道文化財団アトスペース企画展 vol.32

酒井広司 個展 「山に行く」

会 期：平成29年3月30日(木)～6月30日(金)
9:00～17:00

休館日：土・日・祝日

※都合により臨時休館する場合があります。

会 場：北海道文化財団アトスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)

入場料：無料



「Sapporo Portraits」
札幌円山



「北海道の旅」
洞爺湖から羊蹄山

財団事業インフォメーション（平成29年3月）

人づくり一本木基金（長原賞・スチウレ・エング 人づくり基金）

●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な方々に、「ものづくり一本木選奨」を贈呈しました。



○ものづくり一本木選奨 長原賞

桑原 義彦 さん

（木工職人/家具デザイナー/職匠工芸代表取締役/
旭川家具工業協同組合会長）

国際技能オリンピック世界大会（スペイン開催）家具部門で銀賞を獲得するなど、木工職人として頂点を極める。自社を、道内を代表する家具メーカーに育て上げただけでなく、自らデザイナーとして自社製品の開発に取り組むとともに、旭川家具工業協同組合会長や上川地方技能訓練協会会長、国際家具デザインフェア旭川開催委員会会長などを務め、次代を担う若手の職人やデザイナーの育成に力を注いでいる。

○ものづくり一本木選奨 奨励賞

安藤 哲平 さん

（家具・木工職人/（株）ガージーカムワークス）

- ・平成26年第18回とやま木造住宅設計コンペ特別賞。
- ・平成28年第54回技能五輪全国大会家具部門に初出場し、金賞受章。

藤木 翔希 さん

（左官職人/中屋敷左官工業（株））

- ・平成28年第54回技能五輪全国大会左官部門に初出場し、銀賞受章。

北海道舞台塾事業

●希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」

全国に門戸を開き、次代を担う劇作家や優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことにより、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的として実施しています。

今年度は、優秀賞として『Sの唄』（藤原佳奈作）と『海の五線譜』（吉田小夏作）の2作品が受賞しました（大賞に該当する作品はありませんでした）。

平成28年度北海道戯曲賞 優秀賞作品

『Sの唄』

藤原 佳奈 さん

（劇作家/演出家/俳優 mizhen主宰）



『海の五線譜』

作：吉田 小夏 さん

（劇作家/演出家 青☆組主宰）



【受賞者プロフィール】

1987年兵庫県姫路市出身。京都大学文学部卒業。2012年に演劇創作ユニットmizhen旗揚げ。以後全作品の脚本や構成、演出を担当。2015年より、Webメディアキューコレにて、小説『俺の三橋』連載。2015年福岡市文化芸術振興財団 舞台演出家コンペティション『一つの戯曲からの創作をとおして語ろうvol.5』にて観客賞受賞。『夜明けに、月の手触りを』が、第21回劇作家協会新人戯曲賞最終候補にノミネート。第5回クォータースターコンテストグランプリ受賞。

【受賞者プロフィール】

1976年神奈川県横浜出身。2001年に青☆組を旗揚げ。『雨と猫といくつかの嘘』、『時計屋の恋』等、4つの作品で日本劇作家協会新人戯曲賞に入賞。日本演出者協会主催「若手演出家コンクール2003」<作/演出部門>にて、『初雪の味』で審査員特別賞受賞。第9回、第11回AAF戯曲賞、第2回せんだい短編戯曲賞、で最終候補ノミネート。『パールの食堂のマリア』で、平成28年度(第71回)文化庁芸術祭参加。